

新品種「ひだ国府紅しだれ」の実生台木は モモ若木の枯死障害回避に有効

近年、凍害が原因と考えられるモモ若木の枯死障害が全国的に増加しており、その防止対策の早期確立が強く求められている。このため、枯死障害の防止に有効な台木を育成するため、1996年に岐阜県高山市国府町在来の観賞用ハナモモの自然交雑実生の中から有望系統を選抜し、2008年3月に「ひだ国府紅しだれ」として品種登録された。そこで、岐阜県中山間農業研究所によって明らかにされた本品種のモモ用台木としての特性を紹介する。

☆ 技術の概要

1. 本品種は、樹姿が枝垂れ性で樹高が低く、花卉は紅～緋色で八重咲きである。果実は平均35gと小さく、粘核で双胚果の発生が多い。満開期は4月下旬で、成熟期は満開後約150日の9月下旬～10月上旬である(図1)。
2. 実生の樹高や幹径などの揃いは良く、根量が多く深根性で、台木に使用した場合には、主要品種との接ぎ木親和性が高い。
3. 実生台に使用した場合、「おはつもも」や「長野野生桃」などの慣行台木に比べて若木の枯死や主幹部障害の発生が大幅に軽減される(表1)。
4. 穂木品種の樹勢が弱くなり、樹冠の拡大は慣行台木に比べてやや遅れる。また、6年生樹までの収量は「長野野生桃」よりやや少ないものの、果実品質には大きな差がない。



図1 「ひだ国府紅しだれ」の樹姿

表1 台木の違いが「白鳳」5年生樹までの枯死樹および主幹部障害の発生に及ぼす影響(2008年)

台木品種・系統名	供試樹数	枯死樹数	枯死率(%)	生存樹	
				樹数	障害程度 ²
ひだ国府紅しだれ	8	0	0	8	0.9
おはつもも	8	8	100	0	—
長野野生桃(晩生)	6	1	17	5	4.4
モモ台木筑波5号	6	2	33	4	2.0
モモ台木筑波6号	6	3	50	3	3.0
ネマガード	6	2	33	4	2.0
オキナワ	8	4	50	4	2.8

² 生存樹の主幹部障害を 0: 障害なし、1: 表皮荒れ、2: 表皮亀裂、3: 被害部位の長さ10cm未満、4: 同30cm未満、5: 同30cm以上、6: 主幹のほぼ全周が被害とした場合の平均値
 ・2003年9月に台木長10cmで芽接ぎ
 ・2004年3月に列間4m×樹間1.5mで定植し主幹形で管理

☆ 活用面での留意点

1. 種子貯蔵中の腐敗を防止するため、核に付着した果肉を十分に洗い落としてから貯蔵する。
2. 発芽した実生の中には、一般品種との受粉により枝垂れ性を示さない他殖個体が混在する可能性があるが、台木には枝垂れ性を示す自殖個体を使用する。
3. 詳細については、岐阜県中山間農業研究所・試験研究部(電話: 0577-73-2029、電子メール: c24402@pref.gifu.lg.jp)にお問合せください。

(農研機構果樹研究所 研究調整役 別所英男)